

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300089		
法人名	社会福祉法人 典人会		
事業所名	グループホーム「ひまわり」		
所在地	岩手県大船渡市大船渡町字山馬越196番地		
自己評価作成日	平成27年2月20日	評価結果市町村受理日	平成27年5月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kihon=true&JigyosyoCd=0370300089-00&PrefCd=03&VersionCd=022
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益財団法人いきいき岩手支援財団
所在地	〒020-0015 岩手県盛岡市本町通三丁目19番1号
訪問調査日	平成27年3月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム「ひまわり」は、現在19年目を迎えております。認知症と併せ、加齢に伴う機能低下等もあるお年寄りが、生き生きとした暮らしを営んでいただくための関わりを大切に考え、日々模索しております。そのような中で、特に地域と関わりをもつ活動を大切にしております。日々の買い物を始め、季節を感じれる活動、公民館活動(一斉清掃)など、こちらから出向く活動と併せ、定期的に地域住民と共に地域交流会を開催し、「ひまわり」へ多くの皆様に足を運んでいただいております。地域交流会を通して、「ひまわり」のお年寄り地域住民が集い、言葉を交わし美味しい食事を囲みながら楽しく交流を深めております。その関わりの中には、「もちつもたれつ」「お互い様」という言葉も交わされておりますが、まさにその関係性こそが、日々繰り返される利用者のお年寄りスタッフとの関わりで、一番に大切に考えていることであり、スタッフとしても良い振り返りの機会となっております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所開所当時、認知症への一般的認識としては、現在とは大部分での違いがある状況の中での事業開始以来19年目であるが、苦節の年月が偲ばれ、その土台の上に認知症介護の実践が積み重ねられて来たことが、各所各部門に見られる。それらは、職員の持つ意識であったり、積極的な地域との関わりといった取り組みであり、認知症介護高齢者への地域の理解と関係機関の協力支援につながっている。中でも、認知症をメインテーマとした寸劇の公演活動(気仙ボケー座)、また介護分野に携わる人材育成の研修会などへの講師派遣など、それらで育まれた人材が、各分野での活動を担う人材確保につながっていると思われる。法人内各事業の連携による総合力で、高齢者地域福祉の拠点となることが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input checked="" type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input checked="" type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input checked="" type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	まずは利用者のお年寄りの気持ちを受け止め、理解することを意識して、日々関わらせていただいた。それをもとにスタッフの想い、家族の想い、お年寄りの想いとを併せて理念の構築を実践した。そして「ひまわり」の花びらにしたため、皆で集うリビングに掲げている。	法人内人事異動で職員の入れ替えもあるところから、新しい理念の作製に職員全員で取り組み“あなたをみつめています”、“お互いさまの気持ちを大切に”など、分かりやすい文章や思いを表現する単語を花の図に配置し作りあげ、リビングに掲げて、利用者にも伝わるよう工夫されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎日の買い物を始め、地域のお祭りや公民館活動にも可能なだけ参加させていただいている。また、近隣の地区公民館を中心に地域交流会を定期的に開催しており、地域住民やPTAなどとの交流の場を設けている。	地区公民館で開催される定例の地域交流会に参加し、活動を通して地域の方々との交流に努めている。認知症理解の啓蒙活動として、平成8年度に立ち上げた法人内職員による劇団“ポケ一座”の公演活動は、劇団スタッフの確保に難儀しながらも続けられ、認知症介護の実践経験を活かした社会貢献の一つとしてその実績を積んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人として取り組んでいる、認知症の理解を寸劇を通して伝える気仙ポケ一座を、地域交流会で開催するなど、地域への認知症の理解の啓蒙活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度6回の運営推進会議を開催している。毎回地域の方々を始め、関係する皆様方に多くご参加いただいている。会議の中では、日々の暮らしの様子をスライドにして紹介する他、スタッフの研修状況も報告している。地域交流会の相談も随時行い、意見をいただきながら実践に繋げている。	事業所が、3つの行政区に関わっていることから、各地区複数の代表の方々、多数の関係者で構成されており、事業所の行事の開催などに意見が出されるなど、有意義に会が運ばれている。毎回、事業所より、職員研修の実施の状況について内容と共に報告し、介護サービスの質の向上に向けての研修の様子が伝えられ、外部の人々の目を通して事業所の取り組みに対し、地域の理解と支援を得るための貴重な存在となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には市の担当者にもご参加いただいている他、市が主催して開催する地域ケア会議にも参加しており、随時情報交換を開催している。	毎月1回市の主催による、「地域ケア会議」が持たれ、介護保険事業同士の情報交換や事例相談もでき、行政との連携にも繋げている。また、災害時の福祉避難所として併設の事業所と共に防災協定が結ばれており、地域福祉の推進につなげている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についての勉強会を開催し、引き続き身体拘束をしないケアを継続するよう取り組んでいる。時に使ってしまうような、「ここで待って下さい」といった言葉による拘束には十分に注意して取り組んでいくことをスタッフ皆で再確認していきたい。施錠は防犯上夜間帯のみ実施している。	事業所での月1回～2回の「ひまわりミーティング」で身体拘束などの勉強会を行い、日常の現場で起こりやすい事例は、その場で気付いて学んでもらうよう職員同士が協力し合っている。特に、利用者の行動を注意深く見守ることに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人で主催した虐待防止等についての研修会に参加している他、事業所ミーティングでも話合っている。日々、不適切なケアが出ないように、また、見過ごすことの無いよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護についての、専門的な研修会までは開催していないものの、権利擁護を利用されている利用者の事例に触れサービスの内容等について共通認識している。今後、成年後見制度を始めとする権利擁護についての勉強会を開催したい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所及び短期入所利用の際は、ご家族に対し契約書及び重要事項説明書を中心に、丁寧に説明することを心がけている。また、制度改正に伴う料金変更についての際も同様に、丁寧に説明するよう心がけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族が意見や要望などを表せる機会として、ケアプランの検討と併せて家族面談を実施している。そこでいただいた要望等はスタッフミーティングや申し送りノートを通して周知し、実施に向けて取り組んでいる。運営推進会議でも同様に要望を伺う機会を設けている。	介護計画の検討の際に、家族面談で、意見・要望を聞く機会にしている。その意見や要望は、ミーティング、申し送りノートで職員に周知出来る仕組みとしており、サービスの質の確保・向上につなげている。また、運営推進会議時も、家族の方々からの意見を聞く機会と捉えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月開催している、「ひまわり」ミーティングでスタッフから意見や提案を聞く機会を設けている。改善や工夫が出来るような内容であれば、スタッフと相談の上、実施している。事業所内で解決出来ない課題は、主務者会議や運営会議を通して検討している。	利用者の状況や実情を直に知る職員の意見・提案は、定例的なミーティングや日常会話の中で聞くことで、改善に向け取り組んでいるほか、事業所や設備などの事案は、法人本部での検討となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人主催の運営会議を通して、代表者である理事長へ事業運営における報告、相談等をもつ機会を毎月設けている。その他、スタッフがやりがいを持ちながら仕事出来るよう、人材育成の視点を第一に考えた人事考課導入に向け、法人全体で取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人主催の介護員部会を始めとする各種部会、感染症対策委員会や事故防止対策委員会を始めとする各種委員会を通して、スタッフのスキルアップのための取り組みを行っている。各活動の報告は、運営会議にて定期報告されており、随時、代表者である理事長より指導を受けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	全国、岩手県ともグループホーム協会に加盟しており、協会が開催する研修会に定期的に参加させていただいている。また、法人内において、グループホーム同士で交換研修を開催するなど、情報交換も含めスキルアップに繋がるように勉強会を開催している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所を予定される利用者のお年寄りの自宅を訪ね、お年寄り自身から不便されている所、不安に思われている所などを伺うようにしている。自宅に訪問することで、暮らしの匂いを共感することもでき、入所後の関わりにも大いに活かしていくことが出来ていると考える。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅に訪問させていただいた上で、ご家族から心配されている所や不安に思われている所を伺うようにしている。傾聴の姿勢を大事にしなが、グループホームでの関わり(ケア)を説明させていただく。入所後もご家族のお力添えもいただきたいというメッセージも併せて伝えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご家族、ご本人から意向を伺い、また、在宅のケアマネージャーが関わっている場合は、併せて見解をいただきながら、必要としているサービスを優先順位を決めた上で提供出来るように取り組んでいる。他、社会資源の活用も常に視野に入れながら取り組みを進めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「介護する」「介護される」という関係性に陥らないようにスタッフ間で取り組んでいる。まずは、人生の大先輩と関わらせていただくという、謙虚な気持ちを忘れずに、利用者のお年寄りのみならず、スタッフ同士であっても「お互いさま」という気持ちももって関わらせていただくよう心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ホームでの暮らしは、ご家族のお力添えがあつてこそ成り立つものである事を伝え、日々の面会を始め外出や病院受診も可能なだけ同行いただけるようお願いしている。謙虚な気持ちをもちながらも、出来ること、出来ないことをある程度伝え、常にコミュニケーションをとれるよう取り組んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	その方を知る工夫の一つとして、生家や馴染みの地を訪れる「ふるさと訪問」を実施している。同じグループホームで暮らすお年寄りも同行し、可能であればご家族にも同行していただき実施している。実施回数は多くはないが、関わり方の積み重ねを継続して行っている。	”ふるさと訪問”の実施で、利用者本人の生家や現在の自家などの馴染みの場所の状況を知り、本人が培ってきた関係が断ち切らない支援に向けているが、本人の状態(コミュニケーション)や家族等の状況によっては、困難なこともあり、支援にあたって課題でもある。	利用者にとって馴染みの人や場は、心む安心の場と満足感を味わえることだと考えられる。本人がこれまで培ってきたことを把握し、その関係を断ち切らない支援は、不可欠なことではあるが、災害よって、自宅や馴染みの場所を失う現実や、家族その他の状況の変化、また本人とのコミュニケーションが不能になることなど、状況の変化を考えれば、過去の馴染みだけにこだわることなく、新しい“楽しみ”の創造と支援の挑戦にも期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	同じ屋根の下で暮らすお仲間の関係性を積み重ねる関わりを、スタッフも一緒になりながら取り組んでいる。皆で囲む食卓を始め、花見といった季節毎の楽しみなど、関わり方の積み重ねが継続して行われるよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	事情により、暮らしの場が変わることになった際に、次の暮らしの場となる施設の職員、ケアマネジャー、家族等と情報交換会を設けるなど、現在の暮らしの中でリズム良く快適に過ごされている所を可能なだけ継続していただけるよう、継続して情報交換をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントはセンター方式やJ-CPATなどを使用し、お年寄り本人の思いや意向を把握し、日常生活での関わりに活かせるよう取り組んでいる。しかし、お年寄りの本当の思いを知ることは大変難しいことであり、ご家族のお力添えもいただきながら、継続して関わらせていただいている。	利用者本人の思いや意向の把握のために、複数の様式を使って記録・整理し、家族からの情報や意見も組み入れ、日々生活での関りに活かしている。利用者本人のその日の出来事や、職員の気付きを「一行」にまとめ、日記風に記録したものは、家族にも提供したり、職員の学びの材料として有効なものとなっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人から伺う他、ご家族や面会にいらした身内の方々から伺うようにしている。その他、地元が同じ他の利用者から昔のエピソードが聞かれることもあり、利用者同士の関係性を支援する中から思わぬ発見がみられることもある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	定期アセスメントを始め、状態に変化がある時はその都度、状態把握ができるよう努めている。アセスメントは、センター方式を始め、J-CPATも導入している。今後、益々の活用に向け取り組んでいる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランは定期的に見直しを行っているが、そのためのモニタリング、再アセスメントをスタッフミーティングを通して実施している。ご家族からの意向と併せ、可能なだけ利用者のお年寄りの意向を、正確にプランに反映させていただきたいと思うが、難しいと感じる。	定期的な介護計画の見直しを、スタッフミーティングを通して行い、各種の本人に関する記録類の中から検討事項や、家族の意向を盛り込み、本人の状態の変化を見逃すことなく、必要があれば、医師、看護師の意見も聞き、本人本位の計画になるよう努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は、時系列に記入している。関わりの中で、例えば「その人らしさ」がみられた瞬間、そしてその時どのように関わらせていただいていたか等を記録し、スタッフ全員で共有しながら関わりに活かしていきたいが、記録の「質」で振り返った場合、課題があると感じている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズの把握はご本人から伺うだけではなく、ご家族からも伺うよう心がけている。その中でも地域との関わりが重要となっており、馴染みの人や土地との交わりを通して、本人の希望の実現に繋がることがあると感じている。「地域」という社会資源の活用を今後ともすすめていきたいと考える。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	お年寄りのこれまでの人生の歩みの中で、関わりをもってこられた全てのが、そのお年寄りを支える「地域資源」であることから、例えば馴染みの美容院に通い続けることも大切な事と考える。お年寄りを知れば知るほど、「地域資源」の活用に繋がるので、今後とも取り組みをすすめたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在の所、ご本人及びご家族の意向を伺う他、医者の見解も伺いながら協力医療機関の医者に主治医としても診ていただけるよう、入所の時点で相談をすすめている。ただし、専門の診療科目を受診する必要がある方は、主治医は変わらず継続して診ていただいている。	事業所の協力医療機関をかかりつけ医としている利用者が多く、担当の職員が同行し、本人の生活の状態の説明を行い、医師の診断の要点を家族に伝えている。また歯科の協力医院の訪問診察も行なわれている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	健康状態の細かい把握は、介護スタッフと併せ、1週間に1日は看護スタッフもお年寄りと一緒にしながら状態把握を行っている。血圧や体温の他、食欲、睡眠、表情、排泄状態などで変化がある時は、その都度配属の看護スタッフに報告し、必要がある時は、病院受診の対応をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際は、看護サマリーで日常生活の様子と共に、わかる範囲での医療情報も提供している。また、お見舞いと併せ、衣類の洗濯物の管理もご家族支援として行っているが、頻りに馴染みのスタッフが顔を出すことで、少しでもお年寄りに安心感をもっていただけるような関わりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所の時点で、重度化及び看取り介護に関する指針を説明させていただいている。その時点で、時に主治医同席の場で、看取りの時期を迎えられた場合の、暮らしの場所のご希望と延命治療についてのお考えを伺っている。また、事業所で出来る対応についても家族に伝えている。	重度化や看取りに関する事業所の方針を、利用開始時点で家族に説明し、その意向を十分に汲み取り、その時に向けての支援にしている。事業所は看取りの経験もあり、また医療連携の条件にも恵まれていることから、利用者本人と家族の安心が確保されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時等の対応方法として、毎年、普通救命救急講習会を開催し勉強をしている。その他、定期的に行われる、事故防止対策委員会においても勉強会を開催し、他事業所スタッフとの意見交換も兼ねて行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災訓練を定期的に行っている。昼間の訓練を始め、夜間における避難訓練も開催しており、特に夜間帯で、人手の少ない時の避難誘導等の行い方について実践を重ね検討している。また、運営推進会議を通して防災訓練の案内を出しご参加いただいている。	定例的に防災訓練と事業所内で毎月定期日に避難訓練として、全ての職員が避難方法の定着に努めている。地域と連携での自主防災組織の協定を結んでいるほか、併設の事業所と連携の訓練もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーの保護など定期的な研修会等を開催し取り組みをすすめている。しかし、日常生活にある何気ない会話や言葉かけの中で、例えばトイレへのお誘いなど、うっかりと他に聞こえてしまうような声かけをしているなど反省がある。一つ一つの場面を振り返り、反省を活かしていきたい。	利用者の誇りと、人間としての尊厳を守るプライバシー確保の大事さは、研修などを通して職員の理解は出来ているが、日常の行動の中での羞恥心対応などに不十分な所などは、職員間で注意し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の暮らしの中で、お年寄りが意思表示を示す瞬間をもっと作る必要があると考える。特に、意思表示が明確に出来ない方ほど感じる。例えば朝の起床時に靴下を2足準備し、ジャスターを交えながら、どちらを希望されるかをスタッフが感じ取るなど工夫をする必要があると考える。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	可能な限り生活構造をお年寄り自身につくっていたき、そこに必要な支援をしたいと考えるが、もっと工夫が必要と考える。例えば、一日の中で、リラックスする瞬間は誰でもあると思われるが、お年寄りが感じる、ほっとする瞬間が何時なのか、何なのかそれを感じ取る所から取り組みたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの美容院がある方は、家族の協力のもと継続して関わっていただいている。また、その人らしさを表す髪形や服装などを把握し、支援していくために、ご本人からの話と併せ、ご家族からのアドバイスもいただきながら、継続して取り組んでいきたい。現状ではまだ不十分であるとする。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の支度は、買い物から利用者のお年寄りと一緒にしている。ホームに戻ってからも、台所に立って、スタッフと一緒に調理し、味見しながら食事作りを行っている。また、立てない方も座ったままで出来る皮むきといった調理も、可能なだけお勧めし実践している。	利用者の日々の暮らしの中での楽しみと大事さを考え、季節を感じる食材、行事の時の皆で作る事、馴れ親しんだ郷土のものを取り入れる等、メニューの工夫をしている。また時には、食事の場所を特別に設えることや、外食に出向き、特別な気分で食事を楽しむなど工夫を重ねている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	厨房の栄養士を中心に栄養指導を随時受けながら、介護スタッフのスキルアップに努めている。また、調理師資格のある介護スタッフも配属されており、日々のメニューの工夫なども随時行っている。水分補給は、一日に必要な量を摂っていただけるよう、スタッフ間で共通認識し取り組んでいる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	介助を多く必要とするお年寄りは、ある程度清潔が保たれているが、行為自体、自立されているお年寄りについては、声かけや見守りとなっており、細かいところまでの状態把握が出来ていない。今後は定期的に協力歯科医に診ていただくなどの取り組みを検討し、すすめていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄のリズムを把握し、オムツやパットの使用は必要最低限にように考えている。例えば、身体機能が低下されている方でも、日中はオムツを使わないで介助により、トイレで排泄をしていたくなど、個別に実施している。	日中は一人ひとりの排泄リズムを把握し、オムツやパットを使用しないようにして、全員、トイレで排泄することを目指している。利用者の仕草をすばやく察知し、さりげなく声掛け誘導をし、トイレでの排泄を促している。個別的な対応が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	現在、下剤を服用しているお年寄りが多いが、便秘の予防として可能な限り体を動かす機会を増やすなどの取り組みをしている。その他、食生活に気をつけ、出来るだけ多く繊維質を多く摂っていただけけるよう、メニューの工夫をするといった取り組みをしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	現状として、希望されるタイミングにお誘いできていないと思われる方もいらしている。気持ちよくお誘いし、気分良く入浴していただくため、声かけや関わり方など、成功体験をスタッフ間で共有していきたい。利用者のお年寄りが希望される入浴について、今後とも工夫が必要と考える。	希望を伺い、その時間に添えるようにしているが、介助が必要なこともあり、現状は週2～3回、午後入浴となっている。入浴を嫌がる方もいるが、声掛けや関わり方をスタッフ間で工夫しながら支援している。入浴中は会話が弾み、笑い声や歌も聞かれる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安眠を確保する上で、夜間の排泄のリズムや布団の使い方、枚数や重さなど、時にご家族とも連携しながら関わらせていただいている。日中の休息の確保については、意思表示が難しい、特に重度化されたお年寄りについて、更に細やかなアセスメントを実施しながら取り組んでいきたい。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬支援について、看護スタッフのみならず介護スタッフも共同して取り組んでいる。確実に誤薬することなく、服薬支援が出来るよう服薬マニュアルも随時見直し、改定しながら取り組んでいる。また、薬の作用や副作用についても、看護スタッフより指導を受けて理解するように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	楽しみ事の支援は、ご家族の協力もいただきながら、ドリームアゲイン等で実施している。例えばパチンコに行かれるなど、個別に相談・計画して行っている。嗜好品についても、特に馴染みの食品(既製品)については居室で楽しめるよう、ご家族の協力をいただき支援させていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的な外出としては、食材の買い物が多い。元気に歩ける方ばかりではなく、車椅子で買い物に行く場合もあり、出来るだけ多くのお年寄りに外の空気を吸っていただけるよう心がけている。お墓参りや自宅への外出など、送迎を事業所側で行うなど出来る範囲で支援をさせていただいている。	出来るだけ多くの利用者に、外の空気を吸って頂けるように、車イスで出かけることもある。外出を楽しむにしている方が多いので、暖かくなってきたら、利用者の行きたい場所に、頻繁に出かける予定としている。家族や友人等の協力を得ながら、思い出や馴染みの場所を訪問する「ドリームアゲイン」も楽しみにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご本人やご家族の希望がある方については、紛失してしまう可能性があることを、ご家族に了解いただけた場合に、所持していただいている。ご本人がお金を所持されることで、安心や心の支えになっている場合が多く、スタッフはそっと見守りをさせていただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は利用者のお年寄りの希望があれば、していただけるようにしている。手紙は年賀状を始め、書ける方にはお勧めしている。遠方に暮らし、なかなか会える機会の少ないご家族を中心に、手紙のやりとりの機会をもう少し多くもてるよう、取り組んでいきたいと考える。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共同空間づくりの工夫として、例えば壁掛け等季節の設えを工夫している。玄関先にちょっとした、お花を生けたり、天気の良い時などに、皆で集うベランダに花を植えたプランターを利用者のお年寄り準備したりと、気持ちよく過ごせる空間づくりの工夫をしている。今後とも継続して工夫を重ねていきたいと考える。	築18年の歴史が刻まれた事業所内は、住み慣れた家庭の落ち着いた雰囲気が漂っている。和紙で覆った程良い照明は更に落ちつきを増している。玄関先には、花が生けてあり、リビングの装飾と併せ、季節感を感じられるように工夫されている。夏場には、ベランダに花や野菜を植えたプランターを用意し、利用者と職員とで世話をしている。リビングに掛けている古い柱時計が印象的である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居場所の工夫として、リビング脇の和室や、廊下中央にソファを置くなどの工夫をしている。その他、利用者のお年寄りによっては、居室のドアを半分程開けられ、ホームの生活のざわめきを感じながら、居室で一人の空間を確保していると思われる利用者のお年寄りもいらしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた、馴染みの家具や寝具を出来るだけ持ち込みいただく事を、ご本人・ご家族と相談しながらすすめている。また、実際には部屋の勝手が自宅と異なるため、部屋の形態、動線等も考慮しながら、ご本人や家族、スタッフと共同で居室の環境づくりに取り組んでいる。	居室の表札の高さを個々の見やすい高さに合わせている。居室内は利用者それぞれの好みに合わせ、畳の和風・ベットの洋風に設えられ、使い慣れた寝具やソファ・テーブル・テレビ・家族写真・カレンダー・時計等が持ち込まれ、それぞれの好みに配置されている。居室全体に、落ち着いた、住み慣れた、自分の家の自分の部屋という印象が持てる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	例えば部屋の表札を見やすい高さに揃えたり、危険防止の為に、家具の角にクッション材を使用するなど、利用者のお年寄りが少しでも多くの場面で安心、安全に暮らせるよう出来る限り工夫をしている。リビングのテーブルなど、そのお年寄りの背丈にあった家具を用意するなど課題もある。		